
DEATH NOTE ~ War Game ~

嘆きの壁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DEATH NOTE ｛War Game｝

【Nコード】

N4619F

【作者名】

嘆きの壁

【あらすじ】

キラ事件が解決し、三年の月日が流れたある日、二匹の死神が二人の人間にデスノートを持たせ、戦わせると言うゲームを始める。かたやトップクラスの大学に通う学生、かたや学校にも行かない引きこもり、そこに参戦してくる世界一の名探偵。果たして、三人の戦いの行方は……？

第1話：遊戯

毎日毎日、同じ事の繰り返し…

この世は腐ってる…

死神界

「逆鬪體みつつで、俺の勝ちだな」

「ちつ、つまんねーの」

黒い長身の死神はその場に寝転び、大きくあくびする。やることもなさそうに、さも退屈そうなその死神の大きく裂けた口が再び開く。「なあ、もっと面白いことないのかよ？」

正面にいた骨の仮面のようなものを被り、鎌を持っている死神が答える。

「死神界に面白さなんて求めてる事自体が間違いだと思うぜ、リユーク。せいぜい、博打でも打って暇を潰すんだな」

黒い長身の、リユークと呼ばれたその死神が伸びをする。

「あーあ、ほんとに退屈だなあ…」

そう…今の死神界は退屈なのだ。衰退しきった死神界では、どの死神も昼寝しているかリユークのように、博打うつてるくらいしかやることがない。

いや、衰退しているといつても死神が貧困しているわけでもない。死神の身体は人間の身体よりも進化していて、食物を食べる必要もないし、睡眠をとる必要もない。

むしろ、睡眠は死神にとっては単なる「怠け」に過ぎないのだ。

「…リユーク、おまえデスノートについてどれくらい知ってる？」
そこで、骨の仮面の死神が口を開く。

「は？どういう意味だ？」
「デスノートのルール、いくつくらい知ってるんだときいてるんだ」

「なんだいきなり、俺だつてそんな詳しくないぞ。なんか知りたいことがあるんならジャスティン宝石骸骨のどこか、若しくはジジインとこまで直接聞きに行けばいいじゃないか」

「ここでいうジジイとは、死神大王という、死神界を統べる存在のことだ。」

「いや…一度人間界を経験している、おまえの口から聞きたいんだ」
「?…まあいいや、たいしたことは知らないが、ざつと言つていくぞ…」

まず、ノートに名前を書かれた人間は死ぬ…死因を何も書かなければ、そいつは心臓麻痺に…」

ひととおり、ノートに関することを骨仮面の死神に喋る。

「…なるほどね、けつこう知ってるんだな。特に、死神が憑いていないノートが人間界にあつた場合、死神がそのノートに触れれば、そいつがそのノートに憑かなければなくなり、そしてその人間の最後を見届けなければならぬ。…つて言うのは面白いな…仮に自分のノートを人間界に落として、その上所有権を失つた死神がいたとしたら、相当めんどくさいことになるじゃねえか。そんな理由じゃジジイだつて新しいノートくれないもんな。まあ、そこまで抜けてるようなやつはいないか」

似たような境遇に遭つた死神を、俺は知ってるが…」

リユークは心の中で、頭の悪い、白いボロ布のような羽を持つ、あの死神を連想した。

「ではもうひとつ、…リユーク、おまえ最後に人間の名前をノートに書いたのはいつだ?」

「あ?…三年くらい前になるかな。それがどうしたんだよ?」

何かを思い出すような、どこか遠い目で答えるリユーク。

「それは、おまえがデスノートを持たせて遊んでたつていう、あの人間だな?」「ああ、そうだよ」

「なんで、あの人間殺したんだ?普通の人間とか違つたんだろ?」

「まあ…成り行きでな、そうせざるを得なかったんだよ。俺だって、勿体ないと思わなかったと言やあ嘘になる」

「……………」

「……………」

「じゃあ、そ

れが『キラ』の最後だったわけか…」

「そうなるな」

リユークは一通り説明すると、大きくあくびする。

「なるほどね…ほんとに暇を潰すには人間界っていうわけか…」

「ん？」

リユークは体を起こし、骨仮面の死神を見る。

「グラスト、なに考えてんだ？」

グラストと呼ばれたその死神は、少し考え込むような姿勢になると、やがて口を開いた。

「リユーク、俺と人間界で人間を使ってゲームをしないか？」

人間界

「はあー、や

っぱ休憩するにはここが1番落ち着きますねー」

松田は公園のベンチに座ると伸びをする。

「そうだな…」

伊出は渋々と答える。

「どうしたんすか？伊出さん、暗い声出して、やっと例の連続放火魔が捕まったっていうのに」

「いやな…実はさっき、相沢から連絡が入ってたな、緊急会議だそ
うだ」

「…それ、Lの指令ですか？」

「…ああ」

「…はあああー…」

さっきの清々しさとは打って変わり、松田は溜息をついた。

「やる気しないのか？松田」

「ええ、どうせろくなことじゃないでしょう。あいつ（ニア）の指令なんて」

「そういう言い方はないだろ、松田」

「僕はまだ、あいつが魅上の名前をノートに書いて操ったっていう推理、捨ててませんからね…」

「…まあ、とにかく本部に行ってみよう。話はそれからだ」

松田と伊出は公園の近くに停車しておいた車に乗り込む。

…キラ事件が治まり、三年の月日が流れ、人間界はキラが現れる前と全く同じ状況に戻っていた。
キラは死んだ、と考える者や、休んでるだけだ、と主張する者もいる。

だが、なんにせよ、今の人間界はキラがいた世の中よりも荒れているという事は確かだ。

殺人ノート、デスノートは二冊とも燃やされ、地上からデスノートはなくなった。これ以上の事件は起きないだろうと思われていたのだが…

事件は急に訪れた…

「お疲れ様です」

松田はそういって、Lと通信中のパソコンが置いてある会議室へ入った。

既に相沢、茂木、山本が会議室にいた。

「松田と伊出も来た。これで全員だな…」

相沢が通信中のパソコンに向かっていう。

「L、これで全員です」

途端、パソコンの画面に『L』という文字が表示される。

『皆さん、揃ったようですね』

パソコンから音声が発せられる。

ニアの声だった。

『お忙しいところすみません。では、単刀直入に言います…』

キラが現れま

した』

今ここに、再び、『L』と『キラ』の戦いが始まる…

第2話：開始（前書き）

毎週月曜にアップ予定です。文章がいたらない場合がありますがよろしくです^^

第2話：開始

『キラが現れました。』

突然の衝撃報告に驚き、戸惑う一同。

「キラか……」

相沢が咳く。

「なんで……こつちの世界に殺人ノートがまた出てきたってことなんすか!？」

今度は松田が声をあげる。『正確には、またノートが人間界に落とされた、でしょう』

ニアが答える。

「ニア……詳しい説明をしてくれ」

相沢が冷静にニアに言う。『わかりました』

『まず、三日前、つまり11月2日ですね。米国のコロンボ州の留置所で連続殺人犯トーマス・ローが心臓麻痺で死亡。同日、共和党議員の家に強盗、殺人の罪で指名手配中であつたりチャード・モリスが心臓麻痺で死亡。3日、日本で幼児連続誘拐殺人犯の長浜賢二郎が刑務所内で死亡麻痺で死亡。同日、英国の留置所にいたバーバラ・マクドナルドが心臓麻痺で死亡。4日、米国で銀行から20万ドル奪つて逃走したウィリアム・バージェスが心臓麻痺で死亡。同日、日本で連続放火魔の伊東廉と國井君丈が死亡麻痺で死亡。』

……過去の捜査でキラが心臓麻痺以外で人を殺せることはわかっていきます。しかし、今回の場合も、死因は全て心臓麻痺。間違いなくキラです』

淡々と経過を述べるニアに一同は静まる。

『当然、これは極秘の情報です。世界中の報道機関には私がしとしての権限で、報道規制をかけています。これは、キラに便乗された』

ものの出現を防ぐためです』

「……………」

「…ちなみに、現時点でキラについてわかっていることは？」

松田が事件の概要を聞く。『今のところは何も…』

一同が、がくつと肩を落とす。

『わかっていなかったのですが…』

「何？どういうことだ？」伊出が渋々話すニアに素早く反応する。

『…実は数時間前、あまりに奇妙な変死者が現れたんです』

「あまりに奇妙…？」

『ええ、数時間前、新宿駅内で、一人の男が全裸で、右手にやかん、左手に麦藁ぼうしをもって脳梗塞で死亡しました。その男の名は、穂元武博。都内の中学の教師です。詳しくこの男のことを調べたのですが…何も前科はありません』

「……………」

突拍子のない新情報に、誰も言葉を発せなかった。

『変死にしてもこれは不自然過ぎます。前回の事件で、キラが心臓麻痺以外で人を殺せることがわかっていてる貴方達なら、これがどういふことが、わかりますね？』

「しかし、三日前に現れたキラがいきなりこんな殺しかたをするわけが…」

相沢が答える。

『そうです。そういう推測をしていくと、キラは二人いることになる…これは、そのもう一つのキラによる殺しのモルモットということとです。』

仮に、三日前に現れたキラをAとします。そして、数時間前に現れたキラB…先ほど、キラに便乗されるものの防止と言いましたが、こういふことです。下手したらAとBが手を組むことも考えられます。もちろん、これがキラAによる自作自演で、我々の捜査を混乱させるという名目もたてられますが…』

「…では、少なくとも二人のキラ一人は、日本にいる ということ

か？」

『そうなります。しかし先ほどもいったとおり、これが自作自演の可能性もあります。なので報道機関には「キラが再び現れた」以上のことは報道させません。』

「では、変死した男はどうするんだ？日本にキラがいる可能性があるなら我々もその男をしらべ、キラの手掛かりをそこから探すために動くべきだ」

相沢が提案する。

それがわかっていたかのようにニアも

『そうです。注目すべきは殺されたのは教師、という点。いや、キラBの目的はそれなのかも知れない…

…その男の家族、職場の同僚、知人、そしてかつての教え子等を全員調べていくのは容易なことではない…

とにかく、キラが何らかの動きを見せてくるまで、この男を洗うことから始めようと思います。

殺人ノートを使い、犯罪者を殺しまくる。許しがたい悪です。そのうえこの世の神と自称しているのなら、絶対に許しません。

此処にいる人達の中で、キラに見せ付け

てやりましょう。

正義は必ず勝

つということを。』

実は、ニアの推理は合っていた…

キラは二人、存在する。

しかし、それがこの世の悪を排斥する「新世界の神」という大義名分とは、全く別のものだということを、今の彼に知る由はない…

第3話・使者（前書き）

キラの一人目の登場です。

第3話：使者

．．俺はどうして此処にいるのか．．．

．．．．．

．．．．なんのために生きて

るのか．．．

無意味な日々

が、ただただ過ぎていく。

とりわけ、面白いことなんて何も無い小学校時代：

無駄に恋愛に目覚め始め、年中発情期化し始める中学校時代：もちろん、俺はそんなくだらない感情には流されなかった。

別に俺はとりわけ特別な人間なわけじゃない。

ただ、周りの人間よりは知能が高いというのは、自覚はしていたが、冷めてるだけ、性格が暗いだけと言われたらそれまでだった。

目的もなく、普通に勉強し都内のトップ高校に入っても、なにも面白くない。

阿呆ばかり。

町に出れば、喧嘩に明け暮れる世の中において存在価値を見出だせないクズばかり。

社会的価値だけでは人間の価値は決まらないというのは、絶対の真理であるが、当時の俺はそれを卑屈なまでに信仰していた：

実際は、そんなもの綺麗事ではないのに：

．．．．．

この世は、腐ってる…

…いつもと変わらぬ退屈な朝が始まった。そして、退屈な一日の始まりとなる……はずだった。今日、この日から、俺の全てが変わることになる…

今日は学校は休みだが、カ

フェのバイトの日だ。大学生になってからはケータイ代も自腹になった上、今は小遣いも定期的に貰えなくなった俺は、バイトで賄わなくてはならなかった。

正直だるい。が、重い体を起こし支度をする。

やや慌ただしく家を出て、駅まで向かう途中、車道に何か落ちているのを俺は見つけた。

近づいてそれを見ると、黒いノートのような物だ。

「ノート…落とし物か？」特に興味もなかったが、なんとなく拾って表紙を見ると、予想とは全く異なることが書いてあった。

どこの学校の、何年何組の何番の誰々なのかと記名している筈だったが…

『DEATH NOTE』

…こんなタイトルが付いているだけなのだ。

「直訳で、死のノートか…なんの遊びなのか…」

俺は中を見てみた。そうすると、ノートの使い方とかいうのが書かれていた。

…このノートに名前を書かれたものは死ぬ

…殺す者の名と顔がわかっていなければ殺せない

…死因を書くと、40秒後にその通りになる。死因を書かなければ全て心臓麻痺となる。

「…病気だな。完全に」

電車に乗り、バイト先へ向かう途中、俺

はまたあのノートが気になって鞆から取り出した。捨てずに持ってきていたのだ。

「万が一、ここに誰かの名を書いてそいつが死んだら俺は殺人者になるのかな…死んでもいいような奴…」

「…そうだ、あいつの名を書いてみるか」

俺は昔嫌いだっただ教師の名を、18時に新宿駅内で裸踊りした後脳梗塞で死ぬように書いてみた。

「これでマジで死んだら面白いのにな ははは」

俺はノートを何事もなかったかのように鞆にしまふ。「つまんねーな…ほんと」この世で、どうしようもないことが多いことに嫌気がさし、また自分がその辺を歩いているただの1大学生に過ぎず、特別な人間でもなんでもないことに不満を持っていた俺がいた。

いくら都内トップの大学生であろうと、俺はただの人間に過ぎない。「どうせなら、自分の名前でも書くべきだったかな」

バイトが終わったあと、新宿を一人ぶらぶらするのは俺の日課となっている。これとって何か捜しているわけではない。文字通り、あてもなくぶらついているだけだ。

新宿駅内で俺の好きなアップルパイを買って電車に乗ろうと階段を昇ろうとしたときだった。

俺は、信じがたい光景を目の当たりにする

人だかりの中心に誰か倒れている。しか

も全裸でだ。手には麦藁ぼうしと、やかんを持っている…

「えっ、穂元…？なんで…こんなところで…」

俺は混乱していた。知人がこんなところでわけのわからない死に方をしていることに。

そして、バイト前にふざけて黒いノートに書いたことを思い出した。「……………」

悲しいとは思わないし、罪悪感も無い。ただ、何故書いたことが現実となっているのか、そこが全く解せない。

ノートに書いた出鱈目が実現することは無い。当然のことだ。しかし、その当然のことと、目の前の出来事が食い違っている。

俺は受け入れられなかった。

受け入れられない……しかし……

「偶然にしては出来すぎだ……デスクノート、本物か……」しかしどうしよう。こんな常識はずれなノート……なんだか面倒なことが起きそうな予感がする。といつてもここに捨てるのはもつとまずいだろう。

「とにかく家に帰るか……」俺はノートを鞆にしまい、可及的速やかに家に帰る。

「どうするか……こんなことになっちまう

なんて……」

でもあいつは中学時代憎かった教師だ。俺以外のやつだって、あいつにはひどいことをされてる。あいつが原因で不登校になったやつすらいるんだ。今までの学校でも評判悪かったに違いない。

「そうだ……あいつは死んで当然なんだ……！俺が罰したんだ！」

『……罰した、か……どうだ？キラの能力を

得た気分は』

……え？

今……声が……

「……ここだよ、こじ」

「……！うわっ、な……！」そこには、真つ黒な怪物が居た……

怪物は天井に張り付き、慌てふためく俺を見下すように笑っている……この先、この漆黒の怪物が今までの俺の退屈な日常をことごとく変えてみせることになるとは、思いもしなかった……

第4話：娯楽

「な…なんだ…悪魔か…？」俺は、目の前に突如出現した化物に向かつて言った。「ククク…悪魔、ね…そういう言い方もあるかもな…期待に逸れるようだが、俺は死神だ」

「し…死神！？はは…馬鹿な」常識はずれなノートに続き、死神と名乗る常識はずれな生き物に、俺は苦笑したが、一つ気になった事があつた。

「今、キラの能力つて言つたな…？」

「ん？…おお、言つたぞ」

「キラつて、あのキラか？三年前、犯罪者を裁いていた…」

「ククク…他にどんなキラがいるつてんだ？お前は そのデスノートを使つてキラになるんだ」

いきなり現れ、死神と名乗り好き勝手言う化物に俺は少し苛立つて来た。

「ちょっとまってよ！何だいきなり、このノートがただのノートじゃないつてのは分かつたよ。キラがこれで裁いてたつてのには驚いたけどさ、何で俺がキラにならなきゃならないんだよ！」

「さつき、俺が罰した」と言つたじゃないか。まあ、要らなきゃ俺に返してくれて構わないぞ。そのときはデスノートに関するお前の記憶を消すかな」

「な…なんだ、返していいのか…じゃあ、返すよ。こんなノート。それからもう、ここにはこないでくれ」

俺は人の死を呼ぶノートと、死神と名乗る生き物の登場で、いろいろと混乱し始めている。

記憶が消えると、この化物は言つた。

それならすべてを忘れて、ゆっくり寝たいと俺は考え始めた。

しかし死神はここで大きく溜息をつく。

「はあ… もうお前で23人目なのに… 向こうはとっくにキラが決まってるつてのに… 俺がまだ決まってるないんじゃゲームになんねーじやないか…」

「?… いったい、なんの話だ?」

「俺にノートを返す前に少し話を聞いてくれ。」

… 今この人間界には二匹の死神がいる。

一匹目は、この俺、リユークだ。もう一匹はデリダブリーという死神なんだが… まあ会うこともないだろうから知る必要もないが… ようやく名乗った死神 リユークはそういつて話を始めた。

「俺達が何故人間界に来たか手っ取り早く言ってしまうえば、二人の人間を使つて遊ぶためだ」

「… 遊ぶつて、どういう意味だ?」

「つまりな、俺ともう一匹の死神が二人の人間にデスノートを渡し、ノートを持った人間同士戦わすつてことだ」

「… なるほど。二人キラをつくり、どちらが先に相手の名をデスノートに書き込み、始末するかという勝負か…」

「そうだ。但し、死神がそれぞれのキラに手助けしてはいけない。俺達死神は、あくまで見ているだけ、またはデスノートのルールをキラに教えるだけに付きまとう存在に過ぎない。お前は顔も名前も分からない敵のキラの居場所を自力で突き止め、始末しなければならぬ」

「あくまで、死神の娯楽つてことか… …… ん? ちょっと待て。向こう側の死神が同じ様に向こう側のキラと行動を共にするなら、その死神を見つける方が早くないか? いや、条件はこちらも同じだ。死神がとり憑くのなら、俺だつて迂闊に外には出れない。だいたい他の人間に君の姿が見えてしまったらどうするつもりなんだ?」

俺はさつきから疑問に感じていたことをぶつけてみた。そもそもこいつはどうやって家に入って来たんだ… 「ああ、そうか… そんなことまでノートには書き記して無かつたからな… まず所有権の話からしなけりゃな…」

「なんだよそれ？」

「デスノートには所有権つてのがあるんだ。お前が道でノートを捨てた時には既に所有権は誰にもなかった。つまり捨てたものに所有権がある。俺は所有権を捨てるという意思をもってノートを手放したのだからな。しかし所有権を人間が持つ場合は最後にそのノートに触った死神が所有権を持った人間に憑いて、その人間の最後を見届けなければならぬ。そして俺の姿もそのノートに一度でも触れた人間でないとみることが出来ない。ちなみに死神は壁をすりぬけることが出来る。お前の家に入ることだって容易なことだ」

「……なるほど。では向こうのキラのノートに触れない限りは向こうの死神も見れないというわけか……」

「そうだ。まあ、他にもルールは沢山あるが、追って説明していこう。」

「……どうだ。キラになって戦ってみないか？」

俺は多少ながら、その奇抜な状況に楽しみ始めていた。既に腹は決まっていた。これまで、なにかに心を揺さぶられたことはなかった。体育祭、音楽祭、文化祭……俺のいたクラスはどれもほとんど優勝しているが……大学受験や格闘技の大会で優勝したときでさえ、俺は楽しいと思わなかった。

何故だろう。日常的な一部分に過ぎないから、とでも考えていたのか。それはわからない。

だが、目の前にある非日常的なノート、生き物、娯楽は俺の心を無性に奮い立たせていた。

「ちなみに、戦う期間つてのはあるのか？」

俺は聞いてみた。

「一応、一年間くらい何も動きがなかったら、俺のノートでお前を殺すことになっている。まあ、ほんとに動きが無かった場合だがな……」

「なるほど……たしかに、これは娯楽かもな……」

「やりたくなければ強制はしないが、そのときはノートを返しても」

らうぞ。そしてお前のノートに関する記憶も消させてもらう。いいか、このデスノートが、死神・リユークと人間・ナガトロ長瀬匡を繋ぐ絆だ」
そういって、ノートを指指す死神リユーク。俺は決心した。

「このゲーム、やらせてもらうよ。なんだか、ゾクゾクしてきたよ、この先楽しくなりそうだ」

「ククク…こちらこそ、またしばらく人間界で楽しみめそうだ…」

こうしてこの世界にまた、キラが現れたのだった…

二人の殺人鬼の戦いの火蓋が今、切って落とされたのだった…

第4話：娯楽（後書き）

次回の更新は三月十二日の予定です。

第5話・無力感（前書き）

遅くなりまして、申し訳ありません…
今回は二人目のキラの登場
です

第5話：無力感

僕の世界には神が居た。

犯罪者に確実に「死」を与える事で罰する、偉大なる神が居た。その影響は世界に轟いた。神が現れ、世界中の犯罪の七割は減った。それもこれも神が居たからである。ここで、「居た」など過去形を使うのは、その神が既にこの世から姿を消したからである。人によつては「キラは休んでるだけだ」などという者もいる。だが僕には分かつていた。もうキラはこの世に居ない。僕の偉大なる神・キラはいなくなつてしまつた…

キラがいなくなり、三年の月日が流れた…すっかり世の中はキラが現れる前の世の中に戻つてしまつている。キラは…僕にとっては救世主だつた。社会的に弱者である僕にとっては…

今日も憂鬱な朝がやつてきた。とくに何かするわけでもないが、自室のパソコンのスイッチを入れる。

ヴィーン…といった音を立てて立ち上がるパソコン。今日もウィキペディアやら掲示板やら動画サイトやら見て一日過ごしそうだ…

これが、この僕、ホウショウウイン 宝生院 キララ 輝の一日の始まりである…

僕はちなみに15歳である。だが、学校には通っていない。理由は簡単 行く必要がないからだ。…もう少し詳細な説明が求められるだろうな…

僕は自分で言うのもなんだが、頭がいい。いや博識と言つた方が適しているだろう。小学校時代からこんな引きこもりみたいな生活をしているため、勉強くらいしいないとダメだろうなあと思ひ始めた。

というわけで自分で勉強を続け、今は大検の資格も得た。そう、高校も大学も行く必要ない。

しかし今の世の中便利だ。一步も家を出ずにパソコンひとつでなんでも欲しい情報が手に入る。とはいってもパソコンで手に入らない情報だつてないわけじゃない。そういうときは図書館を利用する時もある。僕が外に出るのもそのときくらいだ。

「ちょっと図書館に行くかな…」

『日本書記』について詳しく見ようとしたが、情報があまり手に入らない。というかこういうのは図書館の方が揃ってそうだ。僕はパジャマを脱いで適当な私服を着ると、出かける準備をする。

「輝、外へ出かけるの？」

家から出る前に母さんが珍しいとでもいいたげな目で言った。

「ああ、図書館に…」

「そう、いつてらっしゃい」家から図書館までは歩いて10分くらいだ。僕は手提げに財布とノートと筆記用具を入れて図書館へ向かう。

「もう閉館の時間か…」

時計を見ると17時をまわっていた。僕は資料を借りてそれを手提げに入れると図書館から出た。

その数分後だった…

駅の付近を通り過ぎて、暗い路地を通って十字路を過ぎれば僕の家なのだが、その人だかりのない路地で僕は不良に絡まれたのだ。

僕は何かにつまずいて、転びそうになった。

「いてっ」

見てみると、ヘルメットが転がっていた（置いてあった？）のだった。

「なに（ヘルメット）蹴つとんじゃコラア！！」

怒鳴り声が聞こえた。振り返るとガラの悪いのが3人くらいいた。その中のチンパンジーに似た奴が僕の所にすたすたと歩いて来た。

「コラ中坊、ひとのモン蹴つといてゴメンナサイも無しか？おい」

「えっ、ちょ…」

いや、だって明らか転がして置いたのそっちだろ　と言いたかったが、相手の気迫に負けて声も出なかった。残りの二人の不良もこっちへやってきた。「んだよ、どうした…」

「この餓鬼、人のモン蹴飛ばしといて謝りもしねえんだ」

「そりゃあ良くねえよ小僧、たく、近頃の中坊は…」僕を小僧と言ったニット帽を被った不良が僕の肩に手を乗せた。

「悪いことしたらゴメンナサイだろう？ぼうや」

ぼうやとか言ってくる目のでかい魚みたいな不良が僕の顔を覗き込んだ。しかし僕は、

「……………」

黙っていた。

そりゃそうだ、悪いのは僕じゃない。

「なに黙ってたんだ、餓鬼！」「ぐふっ…」

そう怒鳴ってチンパンジーに腹を殴られた。痛みで僕はうずくまっ

た。
「ったく、態度の悪い餓鬼だな、謝罪の一言もねえとはな！おらっ、なんとかいえっ！」

「うっ」

そういわれて、ニット帽に背中を蹴られた。

「いて…」

くそう…この、社会のゴミが…

「ははっ、根性のねえやつだ」

チンパンジーが笑った。

「オイこいつ、どこの中学だ？そのカバン見てみようぜ」

そういつて魚目の不良が、僕の手提げを取った時だった。

「いい加減にしろ、お前ら」魚目の手を掴んだ人がいた。茶髪で目の細い人だった。身長は180?近くありそうだ。大学生だろうか。手を掴まれた魚目はいきなり現れた茶髪の人を見て怪訝そうな顔をした

「ああ、なんだ?てめえは…って、いてててっ!!」

すると、茶髪の人は魚目の腕を軽くひねあげたのだ。そしてその人は、魚目のみぞおちに膝蹴りを食らわした。

「がはっ……」

白目をむいて、魚目は倒れた。

「てめえっ!よくも…!」

そう言うと、チンパンジーとニット帽が僕を離すと、その人に向かって殴り掛かった。

危ないっ!と僕は言おうとしたが、それよりも早くその人はチンパンジーのパンチを軽く手ではらうと、素早くチンパンジーの腹に強烈な突きを一発食らわした。今度はニット帽が殴りかかったが、その人はスツとよけると、素早くニット帽の背後に周り、ハイキックを食らわしたのだ。

「いつ……てえ…」

その場にうづくまるチンパンジーとニット帽。

「あのさ、拳法三段なんだ…俺。……まだやるか?」

その人がチンパンジーとニット帽を見下ろして、小さな声で言った。が、不良二人を脅すのには十分だったようだ。

「ひっ…す、すいません…」チンパンジーとニット帽は気絶した魚目を背負って慌てて去っていった。

僕は、さっき殴られた所がまだ痛くて、しゃがんでいた。その人は、僕のところにやってきて心配そうに声をかけてくれた。

「君、大丈夫か?」

「は、はい…」

「家はこの近くか?」

「すぐ…そこ…」

僕は苦し紛れに答えた。

「なんだったら、俺が送っていいんか？」

「う、ううん…大丈夫…」

僕は慌てて拒否した。そもそも、人と話すのに慣れていない僕だったし、親切にされるのなんて、もっと慣れてない。

「そうか…わかった、最近物騒だからな。帰り気をつけるよ」

その人はそういつてすぐ去ってしまった。お礼を言いそびれてしまった…

家の近くまできて、僕は自分の不甲斐無さに情けなく感じた。あんな社会のクズ共に…しかも、僕はなにひとつ、抵抗出来なかった。

あの茶髪の人が助けってくれなかったら…僕は…

僕は…！！

「くっ…くそあつ…！！」

僕は、そう怒鳴って近くに捨ててあったゴミ袋を蹴飛ばした。

「くそう…僕にも…力があれば…あんなゴミクズ野郎…あいつらみたいな世界中のクズを…キラに代わって…ううっ…殺してやるのに…ぐすっ…」

気が付いたら、僕は泣いていた。自分の無力さに腹が立って仕方なかった。僕が今までためてきたこの知識が無駄物とされたようにも感じた…

「うう…ひっく…ちくしょう…」

散々泣いた後、ふと前を見ると僕は、さっき蹴飛ばしたゴミ袋の近くに、一冊の黒いノートが落ちているのに気が付いた…

第5話：無力感（後書き）

次回は3月20日更新の予定です

第6話：決意

僕がその黒いノートに気付いたのは数分泣き続けた後であった。蹴飛ばしたゴミ袋が破け、中のゴミがぶちまけられた先に一冊のノートがそこにあつた。なんだかわからないが、人間ならば見入ってしまいそうなモノだった。

「なんだ…？これ…」

拾ってみると、そこにはこう書かれていた。

『DEATH NOTE』

言うまでもないが、直訳で死のノートだ。中を見てみると、英語で使い方がびっしりと書いてあつた。

一通りルールに目を通してみた。

つまり、顔の知ってる人間の名前を書けば、書かれた人間は死ぬわけだ。

「遊びにしては随分凝ってるな…」

僕は家に帰ったあと、じっくりノートを見てみた。

正直胡散くさいってのが感想だが、なんだかこのノートには試してみたくなる魔力があるように思われた。

無造作にテレビをつけてみると、連続放火の罪で逮捕された男のニュースがやっていた。

…どうせ殺すなら犯罪者の方がいいだろうな

そう思い、ニュースに映っていたその男の顔を見ながら、男の名を書いてみた。

確か、40秒後に心臓麻痺だったっけ…

……

なに僕は真に受けてるんだ…

くだらない。

もう寝るかな、疲れたし。そして僕は布団の中に入り眠り始めた。

翌朝。パソコンのニュースサイトで今朝のニュースを見た僕は目を疑った。

昨夜名前を書いた男が死んだらしい…

死亡時刻を見ると、だいたい僕が名前を書いた時間であった。

犯人はいきなり倒れ、死亡したそうだ。死因は…あのノートの説明書きに書かれていた通り、心臓麻痺だった。

偶然だろうと…僕は思った。

しかし

今日も僕は図書館に居た。閉館の時間に昨日とは少し離れた道で帰宅していたが、その道中で、昨日のコンビニが見えた。なんと、昨日僕に絡んできたニット帽の不良がそこにいた。

昨日の今日だったのに、あいつもよく来れるな…

ニット帽はひとりでコンビニの前にしゃがみ込んでタバコを蒸していた。近くには奴のモノだろうバイクが置いてあった。やがてニット帽はタバコを地面にすけるとそれを踏み付け火を消した後、コンビニへ入っていった。

いまだ。

僕はコンビニへ向かって走り、奴のバイクの上に置いてあった奴のカバンを盗んだ。当然ばれたらただじゃ済まないだろうから全力で

逃げたが。僕は近くの公園のトイレに逃げ込むように入ると、奴のカバンを物色してみた。運よくバイクの免許証が入っていた。……そう、今朝ニュースで見た男が、あのノートの力で死んだとしたら……一人じゃわからない……確かめるためにニット帽の名前を書いてみようと思いついたのだ。

「本田 ホンダ 仁太郎 ニタロウ と言うのか……ニット帽の本名は」

まあ、あんなクズの名前なんてどうでもいいが。僕はさっそくニット帽の名前を書き、5分後駅付近の道路で事故死するように書き足した。

「もう5分たったよな……」駅前で立ち尽くしてる僕を、誰も交通事故を待っている人間だとは思わないだろう。さっきから何の騒ぎも起きない……

やっぱ、偶然だったのかな……

と、思った矢先……

ドーン！！！！

なにか大きいものがぶつかったような物音が響いた。

まさか……！

気になった僕は音がしたほうへ走って向かった。

そこには人だかりとトラックと、炎上したバイクと……血まみれのニット帽の男がそこに倒れていた。

こちらからみてわかるくらいまで、トラックの運転手は車内で真っ青になって震えていた。間もなく警察もやってきて、辺りが騒がしくなってきた。

僕は気付いたらその場から駆け出していた。何処へ行くかもわからず、ただがむしゃらに走った。気付いたら家の前まで来ていた。

「デスノート……本物だ……ど、どうしよう……」ニュースの男を含めて二人……僕が殺した……」

僕は吐き気がしてきた。

どうする……捨てた方がいいよな……こんなの……いや、危険過ぎる。

誰かが悪用したら……燃やしてしまおうか？それなら……

「捨てるのは構わないが、燃やそうとか考えてるなら止めてもらいたいな」

「えっ……？ひ、ひゃあっ！な……なに……」

いきなり声が出て、見てみたら想像を越える黒い化け物がそこにいた。タマゴの殻のような頭で口先が長い目の細い化け物だった。家の扉にあぐらを書いて僕を見下ろしていた。

「ば……化け物……」

僕はその場に尻をついて後退りしていた。

「一応言っておくが、私は死神だ」

「はっ！？し……死神って……なにを……」

「立ち話も何だから、君の部屋にいこうじゃないか」それだけいうと、自称死神は僕の部屋に向かっておもいきりジャンプし、壁をすり抜け（！）部屋に入った。

「なんだ……いまのは……」

僕は状況が掴めないまま家に入った。自室に行く前に母親が夕飯を準備して待っていてくれたのに気付いたが、正直食欲はない。それでも無理してとりあえず食べた。あのノートは、手提げに入れて食事中も肌身離さず持っていた。

夕飯を済まし、さっきの自称死神が自室に飛び込んだのを思い出し、扉を開けるのを躊躇った。

「……………」

ガチャッ

「おい、部屋に着くまで何分かかってるんだよ」

「……………」

やっぱりいた自称死神。

「私は死神だ。……ってさつきいったよな？名前はグラストだ。よろしくな」

「ああわかったよ……死神なのね……」

ただでさえ疲れてるのに訳の分からない生命体まで押しかけて来ら

れた僕は少しうんざりしていた。

「まあ、死神かそうでないのか信じるのは君の自由だがね、宝生院

輝君^{キラ}。私が来たのはそのノートについてだ」

ノートと聞いて、僕はびくつとした。いくらクズだと思う人間でも、二人の人間を殺してしまった罪悪感が蘇って来た。

「少し、私の話を聞いてほしいんだ」

そういつて、死神 グラストは話を始めた。

話の内容は、こうだ。

グラストともう一匹のリユークという死神は、デスノートをそれぞれ人間に持たせ、ノートを持った人間通しを戦わせるゲームを始めたらしい。どちらかの人間が先にノートを持った相手を見つけたし、名前をノートに書いて仕留める。そうすれば勝ちらしい。その際ノートを何に使おうが人間の自由だが、戦いの期限は一年間だそうだ。ノートや死神についてもアプローチを受けた。どうやらグラストの姿はノートに触れた人間にしか、すなわち現状では僕にしか見えていないらしい。さらに、ノートには所有権があり、ノートを捨てることは所有権を捨てるのと同義であり、その際にデスノートに関わる全ての記憶が消え、死神も見えなくなるそうだ。ちなみに死神は壁をすり抜けられ、飛び回ることも出来るらしい。そして、このノートこそが、かつて僕の世界に君臨していた神・キラの殺しの道具であったこと……

「で、だ…君には私のそのノートを持って、戦ってもらいたい」

「というか、なんのためにそんなことするの？」

「簡単な話、死神界は暇なんだ。人間使って遊んだ方が楽しいと思っただ」

「…ノートは持っていたい。正直このノートを使い続けるには精神力がいるが…僕は持っていたい。ただ、戦うってのはな…」

「……君は弱い立場の人間なんだね」

「……なんだって？」

「数日前から君のことはみていたんだ。君は引きこもりがちな生活を送ってるね。学校にも行かず、パソコンばかりいじっている……もちろん君が先日不良に絡まれてるのも見たよ。弱いんだね君は。社会的にも、性格的にも」

「う……うるさい！おまえに僕のなにがわかる！」

「わかるよ。君みたいな子は他にもみってきた。君ほど知性のある子はいなかったけど。デスノートをどんな人間に持たせようか、様々な人間を見て考えていたんだ。……使いようによつてはそのノートで、人生が変わるかもよ？」

「……………」

たしかにその通りだ。僕は博学以外なんの取り柄もない人間だ。それならいっそ、犯罪者を消して世の中の悪と戦ったほうが、世界に貢献できる。しかし……対戦相手がいるのが気になる……

「このノート……戦いが終わったら、君に返さなくてはならないの？」
僕は死神に聞いた。

「返して欲しいが、君が欲しいなら君にあげよう。頼んでるのは私だしな。それなりに君に見返りもあつたほうがいいだろう。他に欲しいものはないのか？」

死神とかいうわりには随分親切だな……たまたま現れた死神が性格のいいやつなのか……

「いや、僕はこのノートが欲しい。」

やるよ、そのゲーム。なんの罪もない相手を殺すのは少し気が進まないけど。久々に頭を使えそうだし」「そうか……ありがとう。恩にきるよ。このままパートナーになる人間が決まらなかつたらどうしようと思つたよ」

「ははは、まあふつうの人なら、君みたいな魑魅魍魎な化け物と、このノートを拒むだろうね。」

だげどほくは決めたよ。このノートで僕は……

二代目キラになる！」

第6話・決意（後書き）

次の更新日は27日予定です

第7話：始動

『それでは、現時点でわかっていることをもう一度整理しましょう』
「L」という画面のモニターを通してニアが相沢、茂木、伊出、松田、山本に呼び掛ける。

『まず、今回のキラは二種類いると考えられます。それは犯罪者裁きをし続けたキラが、突然なんの罪のない人を奇妙な方法で殺したことから推測されます。こちらのキラをY、犯罪者裁きを続けたキラをXと称します。さらに、Yキラが殺したその人物を洗っていない、キラが特定できる可能性が非常に高い。よって、私達がこれから率先してやるべきは、殺害された人物の関係者を調査することです。』

「よし、じゃあ二手に別れて操作していこう」
相沢が呼び掛ける。

『そうですね。しかし最低一人はここに待機してください。』
「わかった」

「L」

「どうしました、ワタリ」ワタリと呼ばれた老人 ロジャーがニアに呼び掛ける。

「間もなくワイミーズハウスから彼らがやってきます」

「そうですね…わかりました。こちらも支度をしておきます」

「しかし……よろしいのですかな？」

ロジャーがニアに心配そうな様子で言う。

「…なにがですか？」

「彼らは確かに優秀ですが……まだ若すぎます」

「そんなことないですよ」ニアが即答する。

「若いからこそですよ、ワタリ。彼らも今のうちから経験を積んでおく必要がある。そして彼らは頭脳こそまだまだ私には及びませんが、その他の能力は非常に期待出来るものがある……今回の事件を通して、それを伸ばしたい」

「……なるほど」

「これは私の勤ですが……今回のキラ事件……なんだか私にはただの犯罪者裁きとだけに捉えられないんです……なにか……裏に大きな目的がある……そう感じるんです」

「大きな目的……と、おっしゃいますと？」

「わかりません……しかし、犯罪者を殺し、世界をよくする……それだけが目的だとは思えない……」

そう……なにか……ひっかかる……

「死神の目……だつて？」

Yキラ ナカトロ 長瀬 タダシ 匡は自室でリユークに聞き返す。

「そうだ。今説明した通り人間の残り寿命と本名がそれで見える。

そして、その代価は残り寿命の半分だ。そういう目だ」

「死神は、それで人間の名前を書き、寿命をいただくってことか……」

「前のキラにそのことを説明するのを忘れていて怒られたんでな、早めにお前に伝えておくよ」

リユークはここで、また何か大切なことを伝えていない気がしていた。

うーん、なんか言い忘れてる気がするんだよなあ…… 匡は腕を組んで、しばらく何か考えていた。

「さて、どうする匡。目の取引ならいつでも出来るが、今のうちにしとくか？」

「……いや、まだ止めておこう。その時になったら言っよ」

「そうか。で……どうやってキラを見つけ、そして仕留める気なんだ

？」

「今朝のニュースでやってたキラ復活の一面……アレは向こう側のキラの動きだよな。」

「お前の仕業じゃなけりゃ、そうなんだろう？」

「ああ、これは俺じゃないさ……ぶつちや俺は世界平和なんざ興味ない。キラのようにノートを犯罪者裁きには使わないよ。私利私欲のために、たまに使いそうだけど」

匡は笑みを浮かべた。

「最近になって気づいたんだが……お前ってとことん性格の悪いやつだな……」

リユークがいった。

「そうか？まあ互いの名をノートに書いても死なないという条件下にある君たち死神にはわからないだろうね。人間がデスノートを手にした時とる行動は、たいていは嫌いな人間を殺したり、自分の出世の妨げになる人間を殺したり……いや、このノートを使って殺し屋なんてやる人間まで現れるかもよ？そう考えたら犯罪者を裁いたり、キラの邪魔をする人間だけ殺したりして、自分の利益を考えず世界平和のためにノートを使う奴のほうが非人間的だ。そう思わないか？」

リユークはその質問にうまく答えることが出来ず、口をつぐんだままだった。

「とにかく、これが向こうのキラの仕業なら、近いうちにお会い出来るようになるかもね」「……………」

リユークには匡の考えがさっぱりわからなかった。

「……匡、いったいなにする気だ？」

「ああ、それは、見てのお楽しみ さ」

「……………」

「会えるのを楽しみにしてるよ。キラ」

「……それが、死神の目というのか……」

Xキラ ホウジョウウイン キラ 宝生院 輝は目についての説明をグラストにされたばかりだった。

「そう。しかし、ノート的所有権を失えば、死神の目の効力はなくなってしまうんだ。そして所有権を取り戻し、デスノートについての全ての記憶が戻っても目の効力は戻らない。そしてこれは大切なことだから、よく聞いてくれ。」

「……ノートの所有権を持った者を死神の目で見ると、名前は見えるが寿命が見えないんだ。」

「そういえば、リユークはこのことキラにちゃんと伝えてるんだろうな……」

「それだとどちらかが目を持って、もう片方が持ってないとだいぶ差がつくな。こつちもキラを探しやすくもなる、か………しかし死神の目が……なるほどね……いいね……便利な目だ」

輝は目をかがやかせて呟いた

「なにも今あわてて取引する必要もない。お前がやりたいときに私に言えば、いつでも取引をしてやるわ」「そうだなあ……是非欲しいが、目を持てば、向こうからは僕の寿命が見えなくなる……か……今は止めておこう」

「そうか……ところで大丈夫か？」

「……なにがだ」

「おまえ……ここ数日でいったい何人殺した？人間ならとつくに精神的に参ってる頃だと思ったが」

「いや、参ってるよ。ただでさえ体の弱い僕が貧血を最近よく起こすし、食欲を失った僕を見て、母親にも心配された」

「止めた方が楽なんじゃないか？……とはいってもこつちも面倒なことになるが」

「大丈夫だ。一度引き受けたからにはやるさ。最近じゃ悪夢にうな

されるのも慣れてきた」

「……で、どうやって顔も名前も知らない相手を殺すつもりなんだ？」

「ん……」

輝は難しい顔をし、少し考える。

「ここ数日、僕は犯罪者殺しを一定のペースでやってきた。マスクミの報道規制やら情報操作でなければ、一見キラはこの世にひとりしか存在していないように見えるだろう。しかし、注目すべきは、先日の東京都新宿区の変死者だ。アレはどう考えてもデスクノートによる殺しだ。マスクミがこれを大きく報道しないのは、キラが心臓麻痺以外で人を殺せることを知らないからだ。もちろん世間でもそんなことは言われていない。その日以降、心臓麻痺での死亡者が増えないのは、向こうのキラは犯罪者裁きで世をよくしようと思っていないからとも考えられるが、なにか目的があるのかもしれない……やつは、何故あえて何もしない……」

「……」

この少年は人と話すのはとても苦手のようにだが、こういうことになると非常に饒舌になるんだな……

グラストは輝の話聞き、そう思った。

「先日の事件で僅かながら手掛かりを残してしまったキラは、焦っているはず……なにもしないのは、おかしい。僕ならそのままいい状況を利用し、相手を釣ろうと考える」

「……ああ、そうか、確かにそうかもな」

「だから、向こうが何か行動を起こすはずだ　近いうちにね……」

「それで……向こうが動かなかつたら、どうする気なんだ？」

「そうになったら、別の作戦で揺さぶりをかけるつもりさ」

「……」

「どうしたんだ？グラスト」

輝は急に黙る死神に話し掛ける。

「いや……よくそこまで考えが及んでいるな……」

「何いつてるんだい？ろくに考えもなしにこんな大それたことをしようとは思わないよ。まあ、僕ほどの知能の持ち主でないと、この手の勝負は向かないだろうけどね……」
心外そうに輝は言う。

「だからって僕は、かの名将、ハンニバルのような戦略の天才なんかじゃないよ。凡人たる我々は日頃の努力が欠かせないんだ。わかるかい？グラスト」

「……………そうか」

「だから、僕がやるべきはこのペースで犯罪者を裁き続けることさ。向こうがなにか動きを見せるそれまでは、どつどつと構えていればいい。」

せいぜいあがいてみせろ。キラ」

第7話：始動（後書き）

次の更新は4月3日の予定です

第8話：神童

人間界ではよく、「健全な精神は健全な肉体に宿る」とか言うが、それは嘘じゃないか、と俺は思う。

…数時間前から木造の建物の天井から匡タダシが武道に勤しんでる様子を見ながら死神・リユークは思った。

そう、匡は拳法をやっている。それも全国レベルの腕前の有段者で、何度も大会に優勝しているそうだ。さらに近くの支部の道場を継ぐとかなんとか。

二十歳という若さでそれほどの実力者、なおかつ東大生…周りからは「神童」などと呼ばれてるらしい…

つつても健全な精神を持った人間が、あんな方法でなんの罪もない人間をころすわけねえだろう…

数日前

「で、どうやって向こうのキラを見つける気なんだ？」

「厳密には見つけるわけじゃない。おびき寄せる…と言った方が正しいな」

「おびき寄せるだって？」リユークは不思議そうな顔をした。

「俺が始めにデスノートで殺した相手は、俺が普通っていた中学の教師だった。それは覚えてるよな？」

「ああ、お前との出会いはその数時間後だったしな」「少なからず、それが影響して俺がキラだという疑いがかけられるのに相応しいことになってしまったんだよ」

「？ どういうことだ？ 匡」

「いいか…リユーク」

匡は椅子にすわったまま身を寄せる。

「俺が殺ったあの教師を洗えば、必ず俺の名前が出てくる。つまり、俺がキラだという可能性は先の変死した教師によって数%上がってしまったわけだ。このままなにもしないほうが安全じゃないか、とは俺も思うが、それでは勝負がつかないだろ？」

だから、さらに俺に近づけるようにヒントを与えるわけだ」

「直接向こうがやって来たらお前も困るんじゃないか？キラだとはれたらどうする？」

「そこだな、ポイントは。まずな、東大の近くの大学に通う俺の友人がいる。そいつが受けてる授業の講師を変死させたら、まずキラが潜んでると思われるのは、その学生たちだよな？なおかつ俺が始めに殺したあの教師の生徒という枠組みをし、犯人を絞ったら……」

「ちよつとまで、その友人に罪をなすりつけるつもりなのか？」

リ्यूクが驚いたようにいう。

「結論からいうと、そうなる」

「おいおい、いくらなんでも友人が気の毒じゃないか？」

大丈夫だって、と両手をあげてみせる匡。

「向こうのキラの性格を考えたら、なんの罪もない友人を殺すとは思えない。向こうのキラが綿密にこちらの居場所を突き詰めようと調査をし、友人にキラの疑いをかけたとしても、必ず友人が本当にキラであるのか確かめるはずだ。というか俺でもそうするし。向こうのキラは、友人の名を確認したのちに友人の顔を知る必要がある。誰かに聞き込みでもして友人の居場所を知り、直接接触を試みるやつ……そいつがキラだ。まあ、俺はしばらく誰かが友人に接触するやつを待ち構えてなければならぬけどな」

「……少し都合よく考えすぎじゃないか？遠くから見てくるかも知れないじゃないか。死神の目を持つ奴だったらどうするんだ？目の持ち主ならそのへん歩いて人々の顔見回るだけで、その友人を見つけることが出来るぞ？それに死神の目を持てば視力は格段に上がるんだ。遠くからその友人を探すなんて容易なことだと思っがな」

そうリユークがいうと、匡は首を横に振りながら言う。

「いいや、きよるきよるとしてやるやつがいたらそいつがどこにいようと必ずそのつどチェックする。この小型カメラでな」

そういって、匡は腕につけてる時計をリユークに見せ付けて来た。

「ただの時計じゃないか」

「横についてるネジは、実はネジではなくカメラなんだよ。片端のボタンで写真がとれるのさ」

「…そんなの、何処で買ったんだ？」

「売ってるわけがない。自作さ」

「……………」

器用なやつだな……………

リユークは思った。

「さあて、早速友人の通う大学の講師を調べてみるかな」

そういうとパソコンに向き合う匡。

「…もし友人が死んだらどうするんだ？」

「そうなれば、俺がチェックした中の誰かがキラってことが判明する。そんなときはチェックしたやつら全員の身元を調べる。どうしても特定できなければ、おまえと目の取引をして、チェックしたやつ
の写真を見て名前を知り、ノートに名前を書き込めばフィニッシュ
だ」

「……………」

「それから、キラは俺の予想より少し非道な人間だということも判明するね。俺の行動もさらに慎重を増さなくてはならなくなる」

「……………」

リユークはそれ以上言及しなかった。

「非道」って…お前が言うか？

もし、「あいつ」なら、この状況どうするかな…

リユークは昔長い間行動を共にしたキラのことを思い出していた。

その数日後、某大学の某講師が大学内で死亡

ほんと、えぐいやつだな…リユークは木造の道場の天井で数日前のことを思い返していた。

「待たせたな、リユーク」匡は、道場を出て5分歩いたところで自分のところに来るようリユークに言っていた。あまり道場の近くでリユークと会話したら、独り言を言っているよう回りに思われてしまうからだ。

「人間っておもしろいな、互いに本気で殴り合って戦うんだからな」

「死神界にはスポーツとかないのか？ほんとに博打打ってるだけで一日潰すのかよ？」

「いや、中には人間界により興味を持つてる死神もいる。そういうやつは穴から人間界を覗いたり、実際行って回ったりしているな。」

まあ、仮に格闘技とかがあったにしても、お前みたいに格闘技を悪用しそうな奴らばかりだしな」「失礼なこといなよ、俺は格闘技を悪用したことなんて一度もないぞ。現にリユークと会う三日くらいまえに、不良に絡まれていたガキを助けてやったんだからな」

「ほう…そりゃ初耳だ」

「今初めて言ったしな…そんなことより、なにか革新的なことをやればいいのに。死神は人間より遥かに長く生きるんだから、なんだつてできるだろ」

「今の死神界にそんな活力ある発送をするやつなんかいないさ」リユークは諦めたような口調で言う。

「例えば、さつきいったようにスポーツを流行らせたり、死神大王とかいうやつを倒して下克上を計ったりとか、いろいろあるだろ」

匡が言うと、リユークは笑い出した。

「クツククク……なるほどね、そりゃ面白い考えだなあ……ククク……言っとくが、ジジイ（死神大王）はお前が思ってる以上の存在だぜ」
「まあ、まだ死神界のことはよくわからないけど、それより、向こうのキラ……一向に動きがないな……」

「大学は今休みなんだろう？おまえのところも、その友人のところも。授業が始まれば直接大学に来るかもしれないじゃないか」

「まあ、そうだな……」

匡はいまいちな反応をした。

その同じ頃、ロサンゼルスのとある高層ビルにキラ捜査本部はあった。

そこにたどり着いた三人はしに会うために中へ入っていった。

「ニア！」

三人のうちのひとりが叫ぶ。

「どうしたんですか、レスター指揮官。そんな血相を変えて」

し ニアはあくまで冷静な対応をした。

「ニア、殺人ノートだ。またアレがどこかで使われている」

先に怒鳴り声と共に入った男 アンソニー・レスターが言った。

「ええ、わかってます」

「ならなんで何もしないんだ？」

一緒に入って来た三人のうちもう一人 ステファン・ジエバンニが言った。

「いいえ、もう既に捜査は初めていますよ」

ニアは複数あるモニター画面とコンピュータの前に座り、板チョコでピラミッドを作りながら答えた。

「もう初めているのなら、何故私たちに連絡してくれなかったんで

すか？」

最後の一人 ハル・リドナーがニアに言う。

「まだあなたたちの力は必要ないからです。後々まであなたたちには控えていただきたい」

「まだ」ということは、いずれは必要になる、ということでしょうか？しかし日本捜査本部の方たちでは人数不足ではないでしょうか？」

ジエバンニがいう。

「心配ありません。既に最低限の人材は揃ってます」「揃ってますってどこにいるんです？」

「さつきからいます。三人共」

「三人」

そのとき、SPKのレスター、リドナー、ジエバンニは初めてこの部屋にニアと自分達以外の人物が三人いることに気付いた。

一人は、扉の横で本を読んでいる。

もう一人はニアが散らかしていたプラレールの山の中心から顔を少し出した。

最後の一人を見た途端、SPKの三人は驚愕した。ニアの目の前にある複数のモニターの横で壁に寄り掛かっていたその人物は、顔を上げるとSPK三人を睨む。

その人物にいち早く反応したのは、他でもなくリドナーだった。

「……………メロ？」

「……………」

パキッ……………」

メロと呼ばれた男が手に持っていた板チョコを噛んだ音が、部屋に響いた。

そのとき、ニアが口を開いた。

「さあ、これでキラを捕える支度は出来ました。戦いの始まりです」

第9話：鼎立（前書き）

更新が大変遅れました・・・申し訳ありません

第9話：鼎立

「頑張ってるじゃないか」「なにがだ」

「おまえんとこのキラが、だよ」

「そうか？」

「ああ、少なくともうちんとこのキラよりはしっかり裁きをしている」

「なんもしてないじゃないか。そっちのキラは。行動力はあるが」

「そうだな。対するそっちのキラは、まるで動き無しだな。揺さ振りをかけたのに動きがないって、うちのキラが嘆いてたぜ」

「ああ、引きこもりの典型だよ。うちのキラは。頭は切れるがな。

私と出会う前なんて、不良に絡まれていたからな」

「ほう…？そんなことがあったのか」

「ああ、でも茶髪の男がうちのキラを助けに入ってきてくれたから無事だったんだがな」

「ふーん…なるほどねえ…」

「どうかしたか？」

「いや…ところで、そちらのキラは、こっちのキラの居場所はまだ掴んでないのか？そちらのキラをおびき寄せるってのがこっちのキラの作戦だが…」

「ああ、そっちがそういう作戦に出るだろうと、うちのキラは推測してたぞ」

「まじか？やるな…」

リユークとグラストは各々のキラを戦わす際に、週に一度、会合を開くことに決めていた。

互いのキラがどういう作戦を立てているか、どういう状況にいるかを明確にしておいたほうがゲームを楽しめるからだろう。

もちろん、自分が有利になるような情報は互いにキラに伝えないよ

うにしていた。

死神は、あくまで傍観者なのだ。

とある廃屋の裏で木箱の上にあぐらをかくリユークと、その正面で腕を組んで立っているグラストの二匹の死神は、互いに近況報告をしあっている。

「なあ、そっちのキラは動かないのか？」
リユークが尋ねる。

「ああ、先の事件でなんか居場所はだいたい掴んでいるようだが…
…さつきも言った通り引きこもりでな…」

グラストは困ったような表情を浮かべる。

「こんな真剣勝負にそんなこといつてる場合かよ。表に出るようお前のほうから言ってくれよ。傍観してる側からすると、暇なんだよ」

「人間界では、そろそろ進学期が始まるとか聞いたが、そうなるとうちというのも、もうすぐ始まるんだろう？そのときに動き出すと思うが…もし動く気があるんなら…だけだな」

「そうだな、こっちのキラもそれを予測している」

グラストは少し困ったような表情を浮かべた。

「このままでは勝負がつかなくなるな…」

「ああ、俺はグダグダになるのだけは勘弁だぜ。グラスト、お前のほうから現場に出向くよう仕向けてくれよ。暇だし…頼んだぜ」
グラストはため息をついた。

「はあ…わかったよ…言ってみよう」

二匹の死神の定例会はこれで終了した。

「やっぱ…月がないとつまんねーな…」

「なんで…死んだはずじゃ…なかったのかっ？」

メロの姿を見たジェバンニは当惑するばかりだった。

しかし驚きを隠し切れなかったのはジェバンニだけではなかった。リドナーもレスターも目を見開いている。

「ククク…俺がキラなんかに殺されると思ったのか？おまえら」
メロが口を開いた。

「うそ…今まで…なんで…私達はてつきり…」

リドナーは声を震わせていた。

そんなリドナーを見たメロは…

「クククク…あはははははははっ！！」

急に笑い出した。

「なっ！何がおかしい！メロ！」

レスターが怒鳴る。

「いや…だってあんたら…あはははははっ！ あんまりにも驚いてんだもん…はははは…」

メロは笑いすぎて息を切らし始めた。

リドナーはメロが爆笑してる姿を見て、怪しんだ。

…あの寡黙なメロが…こんなふうに腹を抱えて爆笑するようには思えない…

そのとき、ニアが冷たい声で言った。

「すいませんみなさん。彼はメロではありませんよ」「えっ!？」

ジェバンニは驚いて声を上げた。

「ニア…彼はいつたい…」レスターはニアの元へ寄ると、そっと聞いた。

「彼らが、私の新しい助っ人ですよ」

ニアがそういうと、SPK三人は扉の近くで本を開いていた男がこちらへやってきたのに気付いた。

白いノースリーブに汚いジーパンを履き、黒い短髪の眼鏡の男だっ

た。年齢は30代前半くらいだろうか。垂れ目で無骨な男で頼りない、といったような印章を三人は受けた。

「ティム、みなさんに挨拶して下さい」

ニアが男に言った。ティムと呼ばれたその男は丁寧にお辞儀をする、口を開いた。

「始めまして。SPKの皆さん。私はティムと申します。ワイミーズハウスより、ニアの手助けをするために参りました。ふつつか者ですが、どうぞよろしくお願いいたします」

低く落ち着いた声でそう言った。とても礼儀正しい様子であった。

「ティムの特技は、『格闘』です。それだけでなく、運動能力にも長けています。役に立つ場面もあるでしょう」

こいつに格闘が出来るのか…

ティムの細い体を見て三人は思った。

「では続いて…ロード、出て来て下さい」

おもちゃの山や大量のプラレールから顔を出したのは、ぼさぼさの少し赤みがかかった長髪で黒のスウェットを着た少年だった。歳は10代前半くらいに思える。その肩には、うすらでかいタランチュアが乗っていた。その少年はだるそうに立ち上がり、ズボンに手を突っ込み、尻を掻きながら言った。

「あ…どうも、ロードって言います。ティムと同じでニアの手助けてことで此処に呼ばれました…んで、これはタランチュア、おれのペットで、スパインって名前です…」

甘ったるい声でめんどくさいと言いたげに、それだけいうとすぐにまたおもちゃの山の中に寝そべってしまう。そんなロードの態度もきにせず、ニアは彼についての詳細を話す。

「ロードの特技は『侵入』です。潜入操作で役に立つことでしょう。セキュリティ破り…ハッキングなども勿論彼の十八番です。

それから、彼には動物と心を通わす能力があるんです…まあ、役に立つ場面があるかわかりませんが…」

「じゃあ、最後は私だね」

そういつて前に出てきたメロ…いや、メロの姿をした人物だ。そのとき、その人物が髪を無造作にかきあげたあと、長い金髪がでてきた。

かつらを取ったあと靴を脱ぎ、気付いたら全くメロとは違う緩い雰囲気醸し出している女性がいた。

目の鋭さも消えたが、強気な態度が目に出ていて、下唇が若干突き出ている。

「はじめまして！私はシオンっていいいます。まあさっきの二人とおんなじで、ニアのお手伝いさんの一人です。そんなわけでよろしくね！」

さっきまでの鋭い表情とはうってかわって、屈託のない笑顔で元氣よく挨拶していた。

「彼女の特技は『変装』です。その技術は今見せた通りです。他にも心理学、人格変換術、語学、声変換術など様々な技術を持ち合わせています」

ニアが解説をするが、ジェバンニが不満そうな顔で言った。

「だからって、わざわざメロに変装して驚かさなくても…」

「いえ…私は彼女に、あなたたちを丁重にお迎えするようにと、指示しただけで、だれもメロに変装しろ等と命じた覚えはありません…」

つまり、シオンの悪戯です」

一方シオンは、えへへ…と頭を掻いて笑いながら、「ごめんなさい」と軽く謝るだけであった。

「そういうわけで、メンバーは揃いました。あとはキラを捕えるだけですよ…もちろん二人とも、です」

ニアがそう言った途端にレスターが反応した。

「二人だつてっ？どういうことだ？ニア」

「ああ…そうでしたね…あなたたちまだ知らないですよね…」

ニアは僅かながら億劫な様子を見せたが、すぐに今までの情報、そこから推断できることを説明を شدした。

「それで…キラが二人と…」あらかたの話を聞いたあとでジェバン二が呟いた。

「はい。これが、今までわかっていなかったことです。今から話すことはまだ日本捜査本部の皆さんに話していないことですが、…まあすぐに話すつもりですが…先にあなたたちに説明します。先日　大学の教授が大学内で変死したんです」

「何っ？どういうことだ？いつたい」

「詳しくは私から説明致しましょう」

そういつて前に出てきたのは細くて頼りなさげな男　ティムだった。

「　大学の某教授は先日、大学内で自分の指を噛みちぎって、自らの血液で壁に妙な絵を描いたんです」

「　妙な絵だっ？」

「　これをご覧ください」

ニアが代わりに答えると、目の前のコンピューターをカチャカチャと操作し、複数あるモニターのうち中央にあるものに、その妙な絵と思われるものが映った。

そこには、細い蛇が自らの尾を噛み付いて、その体で円をつくっていた。その円の中心には大きな星が描かれていた。

人の血液だけで…これだけのものが描けるものなのか…

SRK三人は、その壮大な奇妙な絵に戦慄を感じずにはいられなかった。

「教授は、この絵を描いた後に、飼っていたハムスターを口の中に入れ込んだ直後、心臓麻痺で死亡しました。この不可解な死は、ニアが言うようなキラの殺人の為の道具、『殺人ノート』というもの以外にはありえないでしょう。私はまだ殺人ノートというものがどういうものか存じないのですが、人名を書き、さらに死因を書けばそ

の通りに事が起きるノートが存在するというのなら、それで説明が
つきますが…

とにかく、この進情報から二人いると思われるキラのうち一方が、
もう一方のキラとコンタクトを計ろうとしているということが推測
されます。というのも、この不可解な死は殺人ノート以外に考えら
れず、それにより片方のキラにも目がつくことも明らかであり、当
然そのことももう片方のキラもわかっているはず…それをあえて行
うということは、片方のキラにアピールをしている可能性が強い、
ということなのです。

そこで…一つキラを捕えるための策が出来ます」

ここで一旦、ティムは口を閉じ一呼吸すると、低い声で言った。

「互いのキラの動きを観察しつつ、接触をする機会を見計らい、そ
こを一網打尽にする…」

第10話：葛藤

あまりにも漠然としたこの提案に、SPK三人は啞然とさせられた。「まってくれ、機会を見計らうといっても、そんなこと出来るのか？ だいたい、どうやって誰がキラかを見破るつもりなんだ？」

レスターがティムに詰め寄った。ティムは落ち着いた様子で言った。

「落ち着いて下さい。ですから、詳しいことがわかっていないので、これからのキラの動き次第です」

「……」

わかってないなら言うな、と三人は思った。ティムは続けて言った。

「しかし、ここからキラを一人の個人として特定出来る要素があるんです」

「なにっ？ どういうことだ？」

三人は意表を着かれたのか、即座に反応した。

「ここからは私の方から説明しましょう」

先程から黙っていたニアが口を開いた。

「そのまえに、一つ断っておかなければならないことがあります。今回のこの教授変死ですが、一方のキラがもう一方のキラにコンタクトを計ろうとしている、という解釈とは別の解釈が出来ます。それは今回の事件がX、Yキラのどちらでもない全く新しいキラ

Zキラの仕業だという解釈です」

「Zキラだって？」

ジエバンニが聞き返した。

「しかしZキラの登場という解釈は今までの推理を根底から覆すことになってしまうので…まあなにせよこれから様子を見ないかぎり判断も出来ませんが…ここでは前者の解釈を念頭において、今からいうことをよく聞いて下さい」

ニアがコンピュータに向き直ると、なにやら機械の操作をしながら、話をし始めた。

「始めに新宿駅構内で殺された教師…そして今回殺された大学教授…同じキラがこの二人を殺しているという解釈なら、この二人に関わっている人物を洗っていけば大分キラが絞り込める…」

これを見て下さい」

そういつてニアが操作して再びモニターにある映像が映し出される。人名だろうか：20人近く名前が羅列してある。それぞれの名前の横にはA、B、Cの三つのアルファベットがふられている。

「これはタイムとロードに調べてもらったものです。最近まで僅かでも殺された二人の両方に接触してるものを挙げたものです。それぞれの名前の横のアルファベットは、AからCまで重要度を示したものです」

ニアは体を半分SPK三人に向けながら、淡々と話した。
レスターが前に出てモニターをよくみた。

「なるほど、この中にキラがいる可能性は非常に高いな」

「そうです。我々はこのリストアップされた人達を調査しなければなりません。それも我々の存在、捜査の目的を知られることなしに、です」

「わかった。私達に出来ることがあれば協力しよう」

「おねがいします。すぐにでも日本捜査本部の皆さんに連絡を取り、この話をします」

ニアはまたコンピュータに向き直ると、通信の準備を始める。

すぐにでも日本捜査本部に連絡するつもりなのだろう。

「ニア、我々だけでも何か出来ることはないだろうか？我々にもキラを追ってきたというプライドがある」レスターがニアに言った。

「レスター 指揮官…」

ニアがゆっくりと喋り出す。

「今回の事件は前回と比べて解っていないことが遥かに多い……実質、前回の事件は初代Lの捜査結果、そしてメモの協力が無ければ

私は負けていたでしょう。特にあの時…メロがいなかったら、イエローボックスで私は魅上に殺されて、今こうして捜査などやってないでしょう。

だから今回再びキラが現れた時、正直私は不安だったんです…初代Lや、メロがいなくても、あの凶悪な殺人鬼を捕まえることが出来るのか…」

「……………」
SPK三人、そしてティム、ロード、シオンの三人も黙ってニアの言葉を聞いていた。

「ですから今回、私の後継ぎ候補であったティム、ロード、シオンの三人を呼び寄せたんです。もちろん、三人の力を更に伸ばすという目的もありましたが…

なにも解っていないこの状況で、迂闊なことは出来ないんです」

「……………」
さすがにレスターも言葉を繋ぐことが出来なかった。流れる沈黙……………それを破ったのはリドナーだった。

「ニア、キラ捜査に関わることはなくても、私達で何かサポート出来ることならありますよね？」

「そうですね…その件についても少し考えてはいました…まだ早い気もしますが…

皆さん、前回のキラ事件を思い出して戴きたいのですが、米国の大統領がキラを認めるような発言をしたこと…そして沢山のキラ信者に我々が一時追い詰められたこと、です。今回もこのままキラの裁きが続けばまた『キラを捕まえようとする者』『悪者』になってしまうでしょう。つまり、キラを追うことが犯罪になるということです。キラ信者も以前と比べ、増えているとも限らない…

そこで、あなたたちには警察やキラ信者から私達を護っていただきたい」

「護る…ですか？」

リドナーが聞き返した。

「私達がキラを追っていることが知られば、私達を捕えようとする者が出てくるはず…そういう者から私達を護ってほしいんです。また、私達を捕えようと狙っていると思われる者の存在も知っておきたい」

「なるほど…」

ジェバンニとレスターが頷いた。

「わかりました。任せてください」

リドナーも力強く頷く。

「わざわざお越しいただきありがとうございます、皆さん。

今回も必ずキラを捕まえて見せましょう」

第11話：少数派

僕は小学校時代の大半を家で過ごした人間だ。その理由は簡単だ。僕は「いじめ」を受けていたのだ。小さな頃からアトピー持ちの僕は「汚い」だの「キモい」だの言われて蔑まれ続けた。学校で僕に触った人はみんな、触れた部分を手で擦って、他の人にこすりつけて「うわっ、きたねえ！」などと言ってはしゃいでいる。どうやら僕は「菌」になっているらしい。

さらにいじめはエスカレートしていき、クラスのみんなに避けられるようになった。教室の隅には消毒液が置かれ、側には、

「ばいきんにさわったひとは、これでしょくどくしましょう」

などと小学生らしい幼い字で書かれた貼紙が張られていた。そして、わざと僕を蹴ったり体当たりしたりして、「汚いばいきんに触った勇者」などと奉られる人まで現れるようになった。

僕はとても胸が苦しかった。つらかった。

揚げ句の果てには、僕の下駄箱や机に「ばいきんやろ。学校くるな」などの落書きまでされる始末だ。

そんなこともあり、僕は学校へいけなくなった。親が何かあったのか、としつこく迫るため、学校であった事を話すと、親はすぐに学校に問い合わせ、担任の先生に訴えた。そして、クラスのみんなに「いじめはやめましょう」と先生は呼びかけ、僕は「もうだいたいようぶだから」と親や先生にしつこく言われ、渋谷学校へ言った。だが、結果は分かっていた。ごく少数の人が僕に話しかけてくれたが、それも日が経つごとに減っていった。

少数派の意見なんて、多数派に飲み込まれるだけだ。

僕に話し掛ける人たちも同様に他の人達に疎まれる始末だ。みな怖いのだろう。他に逆らうのが。結局、始めから僕と親しかつた人達も含め僕に話し掛ける人はいなくなってしまうた。

「あいつと同じ運命になりたくない…」
そういう自己防衛的な感情が働くのだろう。所詮、みんな仲良く、
などきれいことにすぎない。他と異なる者は弾圧される。どこの世
界でもよくあることだ。
そのとき僕は決心した。
それが僕の運命だということ…
僕はイエスのように迫害される運命なのだ。
しかし僕はイエスのようにやすやすと処刑はされない。
僕が「異端」だとしても、この世界で成し遂げなければならないこ
と…

「どうしたんだ？^{キララ}輝」死神の声がした。
僕はいつの間にか眠っていたようだ。そして妙な夢を見ていたよう
だ。目が覚めても昔の忌ま忌ましい記憶が僕の脳内にリフレインす
る。気分が悪くなって来た僕は再び机に突っ伏した。

「最近ろくに眠らず犯罪者裁きをし続けているが、体の方は大丈夫
なのか？」

死神 グラストはなおも話し掛けてくる。返事をするのも少し億劫
だった。

「ああ…大丈夫だ…これが僕の成し遂げなければならないことなの
だから…」

「？ なにをいつてるんだ？」
「気にしなくていいさ…」

それより、先日の 大学教授の変死の件…アレ、どう思う？」

「どう、と聞かれても…私には向こうのキラの仕業としか…」

グラストは少し返事に困ったようだ。構わず僕は続けて言った。

「デスノートに決まってる。問題はそこじゃないんだ。』なんでキ

ラは、あんなおびき寄せをしたのか』だよ」

「どういうことだ？」

「まるで…死神の目を持っていて、そのうえ仮面をつけて顔を隠してるやつに、『おまえを殺してやるから出てこい』と言われてる気分だよ」

そういうことか…

グラストは納得した。「僕はね、もっと間接的に呼び掛けてくるのかと思ってたのに、あんなでかでかとした騒ぎにして…なに考えるんだ。馬鹿なのか？向こうのキラは。本気で僕がこのこと大学に自ら足を運ぶと考えているのか？…いや、待てよ…もしかしてキラは…」

「どうした？輝」

「変死した教師二人…その共通項となる人間…そいつを…」

「おいおい輝、ぶつぶつと言ってないで私にも分かるように説明してくれないか？」

思考の世界に入り込みかけた僕にグラストが言った。

「待ってくれ、考えをまとめろ」

僕は腕を組んで、椅子に深くもたれ掛かると、目をつぶり考え込んだ。

……

……

……

「まさか、そんなこと…」ふと、僕は目を開けて目の前でベツトに腰掛けている死神に向き直った。

「何かわかったのか？」

グラストが聞いてくる。

「ああ、よくよく考えたら向こうのキラの意図は概ね予想できる」とだ

いいか…向こうのキラは、罫を使って僕をおびき寄せようとしている」

「囿…だつて？」

グラストは首を傾げた。

「殺された都内の高校教諭…今回殺された大学教授…わかっていると
思うが、これは僕が殺した者じゃない。向こうが殺した者だ。この
二人に関わっている人間、例えばこの二人に恨みを持つ人間等…探
っていけばキラをだいたい個人特定出来るだろう。当然、殺された
二人に関わっている人間、とはいっても複数いることは予想がつく。
そこを探っていけば必ずキラにはたどり着く。」

筈なんだが…」

ここで僕は口を止めた。

再び頭がフル回転し、思考の世界に入る前に、死神がまた声をかけ
る。

「おい輝、説明を続けろって」

「…ん、ああすまん…」

たどり着く筈なんだが、もしそいつを殺そうとして、写真とかで顔
が確認出来なかったら僕はそいつに会いに行かねばならない。いや、
そういうときになったらこっさり遠くから見ろが…そいつがキラじ
やないとしたらどうする？」

「それは『おまえの勘違いだった』、で話は終わるだろ」

「いや、そいつが『キラだった』ではなく、『キラによって、犯人
にしたてあげられた』やつだったらどうする？」

「どういうことだ？輝」

「つまり、本物のキラが、誰か別の人間をキラにしたてあげ、且つ
その人間がいつでもキラの目の届く場所にいるとしたら…おびき寄
せられた僕はまんまと本物のキラに殺されるわけだ」

「……なんかよくわからんな」

「とにかく、殺された講師二人を調べて出てくる人間がキラだとは
思えない。話が出来過ぎている。本物のキラが仕掛けた罠のように
思える。そういうことだ」

「ん…じゃあ、結局おまえはどうするんだ？なにもしないつもりか

？」

「もちろん調べればわかる情報は手に入れるつもりさ。ただ、深入りして危ない橋を渡るほど、僕は馬鹿じゃない。慎重と無謀は違うからね」

「現場となった大学には行かないのか？」

「行くわけないだろ」

僕は即答した。

グラストはというと、なんだか複雑そうな顔をしていた。

「なんだ？なにがいたい？この僕に現場に行ってほしかったのか？」

「い、いや別に、そんなことは断じてないさ……」

慌てて否定する。

「……グラストよ、おとこの深夜、家を抜け出したよな？何処へ行っていったんだ？」

「なっ、いやいや……別に……えっと……そう散歩さ散歩。暖かくなってきたからな。散歩したかったんだ。ほら、おまえあんまり家から出ないだろ？私は立场上おまえの側にいなきゃいけないが……夜中くらいは……」

「ああーわかったわかった。もういい、めんどくさくなってきた」
グラストがごちゃごちゃ言うが、どうせ出鱈目だろっ。

グラストはというと、本当のことを言っているのか考えていた。

リユークと会っていたこと、これは言っても問題なさそうだが、どうなんだろう……

おなじころ、ニューヨークではSPK三人がニアに指示されたことと平行し、キラに対する調査を独自に進めていた。

「なんだが、私たち完全に少数派ね…」

インターネットでの無記名アンケートで圧倒的にキラ支持者が多いことにハルは脱帽していた。

「しかたないさ。世の中そんなものだ。前回だってアメリカがキラを追わないことを声明したとき、手を反したようにキラの支持者が増えた。」

…結局は集団に従属するしかないんだろ」

ジェバンニが答える。

今三人はジェバンニの住んでいる最新のセキュリティを備えた高級マンションを臨時の操作本部としていた。

「キラが世間的に認められるとは…」

レスターがつぶやく。

「本当の正義、とはなんなんだろうな…」

そのとき、レスターの背後から声が聞こえた。

「正義とは、勝者が掲げる掟ルルですよレスター指揮官。そこに倫理的な思想は無用です」

「えっ？」

レスターだけでなく、あとの二人も振り向いた。そこにいたのは…

「ニア！？えっ、どうしてここにっ？」

ジェバンニをはじめ、あとの二人も驚く。

そんな三人には目もくれず、ニアはデスクまで歩いて来て前かがみになりながらスクリーンを見た。

「はかどってますねみなさん。私も少し安心しました」

「はあ…ところでニア、仮にもこのマンションは通常のセキュリティとはわけが違ってますが…どうやってここに入ってきたんです？」

「さすがに私一人ではここには侵入出来ませんよ。ウィザードも一緒です」

そうニアが言うと、入口から先日ニアから紹介があった三人のうち

の一人　ロードが入って来た。

「ちーっす、邪魔しますよっ」と

スウェット姿の赤い長髪の少年はずかすと部屋に入ってくる。その肩には馬鹿でかいタランチュアが乗っていた。

「おいおまえ、そのうす気味悪いクモはなんとかならないのか」
レスターが文句を言う。

「心配しないでいっすよ、こいつ俺の指示無しに勝手に人を襲うことはまずねえから。安心してよ」

軽い口調で答えるロード。

…こんなやつにほんとにセキュリティを破れたのか…「さて、本題だけどね、俺とニアがここに来たのは他でもない。あんたらに知恵を貸してやるうと思っただんでね。

さっそくだけど、なんか聞きたいことは？」

偉そうに喋るロードにジェバンニは頭に来た。

「おまえの助けなんか必要ない！気色悪いクモと共にとつとと出ていけ！この無礼者！」

「ありや…ひどい言い草だなあ…俺傷ついたわ…」

ロードがいかにもわざとらしくいじけてみせる。

黙っていたニアが口を開いた。

「みなさん、ロードがあなたたちの助けをしてくれるのは本当です。今現在では、人手が足りないわけではないんです。なので、一時的にロードをこちらによこしたんです。

こうみえてもコンピュータに関しては何とかなって持っている、必ず役に立つと思いますよ」

ニアにそう言われた三人は黙るしかなかった。

「ま、そーゆーわけだからさ、よろしく頼むよ」

「……」

三人は、なおも黙っていた。

第12話：尾行

前回のキラに憑いた俺は、人間とはなんたるかを色々な側面から学んだ。それゆえに人間界げかいに来て正解だったと思う。

しかしこの世界ではまだまだ俺を楽しませてくれる要素が多くある。前キラはかつてFBI捜査官（正確にはしにだが）に目星を付けられ、「尾行される側」となった。しかし今回はその逆だ。気づかれることのないよう、細心の注意を払いながら友人の後を追い、様子を見るだけの現キラ　　匡タダシに憑く死神リユークはそう考える。

尾行を始めてからはや四日目か……しかし大した成果は無し、か。匡はそんなことを考えていた。

自分の出身中学の教師一人をデスクノートのモルモットとした匡は、更に同じ中学出身の友人の通う大学教授を変死させることで、キラである疑いがその友人に限定できるように工作したのだ。敵キラはその友人を殺すため、友人に近づこうとするだろう。直接友人に接触したり、遠くから友人を見てると思われる人物がいたら、全て時計の隠しカメラで撮影する。撮影した人物は日をばらつかせ、適当な条件で殺す。その中に敵キラがいればゲームセット、という作戦である。

「おい、何処かにいくみたいだぞ」
リユークが声をかけてきた。

「おお、やっと移動か。こうやって身をかためているのも疲れるな。」

匡は軽くストレッチをすると立ち上がる。

喫茶店で一人本を読んでいた友人は、家族を除いて今日は誰とも会

っていない。そして、自分達を除いて誰も友人を尾行したり遠目から見ている人物もいない。店を後にする友人を見て、匡もゆっくりとそのあとを追った。

その頃、日本の捜査本部は混乱していた。

新宿駅での変死した人物を徹底的に洗っていく計画だったところが、急に某大学でも似たような事件が起きたからだ。

さらに、先ほどのニアからの通信。

これからやるべきことは、この数日の間で新宿駅の教師、そして大学教授のそれぞれに僅かでも接触した者全てを調べること。さらに両方の共通の教え子を現在から過去まで遡り、念入りに調べること。今回のキラの正体が学生である根拠としては弱い、殺しのモルモットにされた人物が共に教師であることから、確率では後者が高い。ニアはそのような考えを日本捜査本部に示したのだった。

相沢たちは死亡した二人に数日の間に接触した人物を調べる班と、二人の共通の生徒を調べる班の二班に別れることにしたが、明らかに人手が足りなくなってしまう。

現在の日本捜査本部のメンバーは相沢、模木、伊出、松田、山本の5人。最低一人は本部に居なければいけないため、実質4人での調査となる。

そこでニアがある提案を出したのだった。

『そちらの捜査本部に2人、人材を送りましたので、よろしくお願ひします。』

その二人のうちの1人と日本捜査本部のうちの誰か1人、計2人で共通の生徒の方の調査を行うことに決まった。

「送られてくるのはきつとニアの部下っすよね？どんな奴なんだろうなあー」

松田は連絡を聞いてからそう言った。

「ひよつとしたらSPKのうちの誰か2人かも知れないぞ、松田」
「あれ？ニアは今ワタリだけと捜査してるんじゃないんすか？」

「SPKが今回の事件のことを知らないわけがない。だとするとニアたちと一緒に捜査してると考えられないか？」

首を傾げる松田に伊出が言う。

その時、入り口の方から鍵を外すような物音が聞こえた。

「なんの音だ？」

「僕、見てきますよ」

山本が音のしたほうに小走りで向かおうとした時、2人の人物が部屋に入ってきた。

「うわっ！な、なんだ？」

山本は驚き、思わず道をあけた。

1人は全身黒のスウェット姿で、赤い長髪の少年。その肩隣には毛だらけの大きなクモが乗っている。

その隣には赤髪の少年と同じくらいの小柄な体型で、全身白のゆったりした服を着ている銀髪の少年

なんとニアだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4619f/>

DEATH NOTE ~ War Game ~

2010年10月10日05時52分発行